

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： グループホーム 若園荘 3階ユニット

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100287		
法人名	医療法人 帰厚堂		
事業所名	グループホーム 若園荘 3階ユニット		
所在地	〒020-0886 盛岡市 若園町8-11		
自己評価作成日	令和4年11月24日	評価結果市町村受理日	令和5年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

盛岡市の中心、中津川に架かる上の橋から南に400メートル程の所に位置し、盛岡市内循環バス「でんでんむし」の停留所の正面に事業所があります。幼稚園、小学校、高等学校、武道館の社会資源にも恵まれた環境です。地域の特性を活かしながら、社会との関わりをもち、利用者一人ひとりが生き活きとした生活が送れるように努めています。町内会の一員として、地域の行事や集まりにも参加して皆様と交流を図らせて頂いています。子供会の資源回収や、町内会の朝掃除、道路沿いの植木の水やり、文化祭へ作品提供など、利用者様と共に参加させて頂いております。同法人の医療機関と連携を図りながら、防災意識を高め、利用者の健康管理を行い、安心して生活ができるよう支援しています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近隣には幼稚園、小学校、高等学校、武道館等の教育機関があり、また、事業所前にはバス停留所もあって、事業所は交通の便もよく賑やかな場所に立地している。1階は事務所、2階、3階に各ユニットがある。系列法人医療機関の医師による訪問診療、看護師による健康管理、管理栄養士による栄養面、歯科衛生士による口腔ケア等、多職種協働による日々のきめ細かなケアが実践されている。コロナ禍にはあるが、町内会の朝清掃、小学校の資源回収への参加、地区センターへ文化祭への作品の展示等、地元地域との交流を深めている。また、向かいのコンビニエンスストアとの災害時の協力体制なども構築されている。職員は、日頃の利用者の様子を各種記録に整備し、情報共有を行いながらきめ細かなケアを行ない、また、職員により事業所運営に関しての意見交換を通じ、ケアの向上に具体的に活かされている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号		
訪問調査日	令和5年1月17日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝のミーティング時 理念の唱和を行い、職員一人一人び理念に沿ったケアが実践できるような意識付けしている。ミーティングを通して共有も行って、管理者は各職員に対し実践の確認もしている。	法人の基本方針をもとに、事業所独自の目標を設定し毎年度職員間で協議を行い見直しを行っている。その目標に基づき、具体的行動目標を掲げ日頃のケアの実践に繋げている。今年度は緊急時の対応の充実を追加し、取り組みを行っている。事業所の理念は毎朝のミーティングで唱和し職員間で確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	4～11月の間、地域の町内朝清掃に参加。子供会の資源回収にも協力を行っている。コロナ禍の為、限りはあるが町内会行事にも参加している。	コロナ禍にあつて、これまでの地域の行事への参加は縮小せざるを得ないが、主に職員は、町内清掃、子供会の資源回収に参加している。事業所前に設置されたプランターへの水遣り、地区行事物品の保管、地区センターでの文化祭へ利用者・職員の作品展示など、可能な範囲で、交流を継続している。利用者の高齢化・介護度のアップにより、利用者が地域に出向いての活動が難しい状況になってきているが、今後も継続して地域との交流を深めることとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人広報誌を通し、地域や家族に情報を発信している。運営推進会議(書面)などでも、認知症の理解が得られるように施設の現状に合わせ報告している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の為、運営推進会議は書面にて開催。活動内容や入居状況の報告を行っている。	コロナ禍の中で、今年度これまで4回は書面開催とした。会議メンバーは地域包括支援センター、地区会長、民生委員、利用者及び家族、管理者、職員で構成されている。委員に会議資料を送付し意見を求めているが、これまでは特に意見・要望はなかった。なお、利用者個々の日常生活やヒヤリハット報告なども、個人情報に配慮しながら資料提供している。	コロナ禍にある中で、書面開催がメインとなっている。メンバーから意見がないか確認している。委員からより活発な意見を求め運営に反映するためにも、返信用様子を添付する等、委員が意見を出しやすい方法に取り組むことを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護保険の改正時など相談や問い合わせをし、アドバイスを電話やメールなどで行っている。	介護保険に関する情報等について、随時連絡を取り合い、年4回発行される法人のお便りも提供している。コロナ禍以降、書類のやり取りはメールで行うことが増えたが、必要時には電話で連絡を取り合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	権利擁護の勉強会を荘内勉強会で行い、身体拘束が及ぼす影響について学んでいる。また不適切なケアについて理解し日常のケアに活かしている。	身体拘束委員会は、管理者及びユニットリーダーで構成され、3か月に1回開催し内容については全職員にも周知している。アンガーマネジメントにより、自分の感情の特徴を知り、スピーチロックに当てはまることを言っていないか、日々の業務はどうかなど、職員一人一人が見直す機会を作っている。日常ケアの中でのスピーチロックについては、相互に注意喚起している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	荘内での勉強会にて、スピーチロックなどについて全職員で学び、日常的に配慮している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	荘内勉強会にて実例を挙げ、職員に理解しやすいよう実施している(成年後見人制度等)。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をかけて同意を得られるよう説明している。介護保険の改定時には、文章等でお知らせし、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	行事の立案は職員のアイデアを頂き、反省や振り返りも行っている。	コロナ禍にあり、現在はガラス越しの面会がメインとなっており、家族と利用者が相互に顔をみながら携帯電話で会話している。面会時、家族を通じて利用者から新聞を読みたい等の要望があれば希望に沿っている。居室担当者は、2か月に1回「身体面、精神面、その他」についての生活記録に利用者個々の写真を添付して各家族に送付している。家族の来訪が無理な場合は、電話やオンラインでの面会としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ストレスチェックで個人の健康管理を行っている。	年1回個人面談を行うとともに、年1回行うストレスチェックの結果について、必要により産業医と相談し助言を得ている。さらに、業務会議で職員による夕食の調理によりケアが手薄になる等の意見が出され、賛否両論あったが、夕食は湯煎できるタイプの食材に変更した。その結果、ケアの時間が増え、夕方のインシデント事例が減少する等の効果が表れる等、職員の意見が具体的業務に反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コロナ禍にて、研修は減ってきているが、出来る限りリモート、オンライン研修にも積極的に参加を努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	4～11月の間、地域の町内朝清掃に参加。子供会の資源回収にも協力を行っている。コロナ禍の為、限りはあるが町内会行事にも参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会に加入している。また様々な情報を得て、サービスの質向上に努めている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前には必ず本人様にお会いし、本人、家族様の思いや要望などお聞きし入居後に安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時に、聞き取りを行い職員間で情報を共有している。またケアプランに盛り込むこととしている。		

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 若園荘 3階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人様の思いを優先した支援と対応を行っている。また、母体法人とも連携を取っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、さりげない言葉にも耳をかたむけ、利用者の出来ることに目を向け自立支援を意識したケアに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	母体法人ガイドラインに沿って、面会等行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍により減っては来ているが、出来る限り本人様の要望に応えられる様工夫している。(電話他)	利用者の多くは近隣からの入居が多いため、コロナ禍以前は、馴染みのデパートやスーパー等に出かけたこともあったが、現在は外出できない状況にある。そのような中でも、可能な人は自筆で年賀状を出している。また、訪問診療、看護師、歯科衛生士、または薬剤師等の来訪の他に、3か月に1回の訪問理容は事業所以外の人との貴重な触れ合いの場として、利用者の生活に変化をもたらしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の様子を観察しトラブルの無いように対応するよう、努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、情報交換などの支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者が何を思い、何がしたいのかをお聞きし、職員間で共有し、今後のケアに活かしている。	ある程度の意思表示が可能な人は両ユニット合計13名程である。ケース記録に利用者の細かい言動についても記録しており、その内容から利用者の意向を把握し、ケアに活かしている。職員は日頃のケアの中での利用者の何気ない仕草等から思いを汲み取るようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	暮らし方、生活環境を本人や家族からのお聞きし環境整備などに活かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	状況の変化などを観察・記録し多職種へのスムーズに情報共有できるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスを行い、状況に合わせたケアプランを作成し、チームケアに活かしている。	入居時の利用者及び家族との面談で得たこれまでの生活状況等をもとに、暫定介護計画を作成し、3か月後に見直しを行っている。介護日誌や職員、さらには医師、看護師等からの情報を基に居室担当者と計画作成担当者がモニタリングを行い、次の介護計画を立案している。介護計画は、非常に具体的にきめ細かに作成されており、日頃の利用者の状況をつぶさに把握した上で、ケアを提供していることが窺える。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子の記録や、職員の気づきなどを他職種につなげる様努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍にて、電話での会話やリモート面会を実施し交流している。個人の好みや希望に沿って誕生会も行っている。個々に合わせた食事支援や運動、歯科衛生士に居る口腔ケアを定期的に行っている。		

事業所名 : グループホーム 若園荘 3階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域貢献として町内朝清掃や子供会の資源回収、花壇作り、花の水やりは継続している。避難訓練の際、地域の方がへ声掛けし、理解と協力を得ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	法人との連携を図り、月1回の訪問診療を行っている。定期的な往診により日常の健康管理状態の変化への対応が可能となっている。	入居時にかかりつけ医について相談したうえで、内科は系列法人の病院をかかりつけ医に変更し、各ユニットごとに月1回の訪問診療を受けている。内科以外は専門医療機関受診とし、受診は家族同行を基本としているが、職員が代わる場合もある。訪問診療に伴う処方薬は、外部の薬局職員が持参し、薬剤師とは電話等により相談を行っている。また、看護師が日々の健康管理を担い24時間オンコール体制ができています。さらに、歯科受診後には、歯科衛生士による口腔ケア指導を受け、数名の利用者は義歯調整も行なうことが出来た。多職種協働によるケアは、家族にも安心感を与えている。	法人の医師、看護師、歯科衛生士、管理栄養士、更には協力機関の歯科医師、薬剤師等、医療関係者との連携により、きめ細かな健康管理が行われ、日常のケアに活かされている。引き続き、多職種による充実した医療と介護の連携の実践を期待します。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気になったことは、若園荘の看護師へ報告相談し、情報共有しながら支援にあたっている。母体法人外来や一般病棟の看護師に健康相談もできており、連携が取れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退院時は相談員と連絡を取り合い、利用者にとって最善の判断をするよう心掛けている。特に、母体法人病院へ入院中の利用者の情報は密に取り合い、早期の退院を心掛けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合、家族様の意向確認後に支援を行っている。終末期の在り方については、入居時に指針を示し同意を得ている。ACPの考え方を取り入れた取り組みや、主治医との受け入れ態勢などの整備も心掛けている	入居時に、「医療連携体制と看取りに関する指針」を基に重症化した場合の対応や看取りを行っていないこと等を説明し同意を得ている。さらにACP(アドバンスケアプラン)に関する取り組みも行っている。利用者の急変時の看護師へのオンコール体制も確立されている。	

事業所名 : グループホーム 若園荘 3階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や防災マニュアルを整備し、荘内勉強会にて各自対応力、実践力を身に付けるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防計画と合わせて防災マニュアルを作成し、定期的な避難訓練を実施し、地域の方々の協力を得られるよう努力をしている。	年2回避難訓練を行っている。1回目は地震を想定して実施し、2回目は夜間想定訓練を行い、停電時の対応等を日中に実施した。また1階への避難のためのエアストレッチャーの使用方法を職員間で確認している。災害時の非常食の備蓄は、1日程度は事業所内で可能であり、それ以降は法人から供給を受ける体制となっているが、今後事業所内で3日間程度の備蓄をできるよう準備することとしている。なお、災害時には事業所向かいコンビニエンスストアの協力を得ることも確認済みである。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人の生活歴に合わせた対応や声掛けの配慮をし、人格の尊重に努め、傾聴を心がけている。	日中の過ごし方、夜間の室内電気の点灯をどうするか、呼び方をどうするか等は、利用者の希望を確認した上で対応している。利用者間の人間関係に気を配り、必要により共有ホールでの座る場所等を調整することもある。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を確認し、支援を行っている。また、自己決定の機会を多く持てるようなケアに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、無理をしないサービスの提供を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、入浴後の整容も気をつけている。ヘアカラーやパーマなど、個人の希望を優先している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食器拭きなど役割を提供している。食事を楽しみにできるよう、利用者の希望に沿えるよう心がけている。	食事は職員が調理し、利用者は可能な範囲で茶碗拭き、トレイ拭き、テーブル拭き等を行う。朝食・昼食は職員が調理し夕食は湯煎して食べれる食材を購入している。食材はインターネットで購入し、利用者も一緒に選ぶこともある。食事については、法人管理栄養士から栄養バランスや色彩、盛り付け方法等の具体的なアドバイスを得ている。小正月の水木団子、節分、ひな祭り、誕生会、敬老会の仕出し弁当等、利用者から好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士からのアドバイスを得ながら、個別支援を行っている。食事量、水分量を考え、状態に応じた支援を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔状態を観察しながらケアを行っている。週2回歯科衛生士の指導を受け、清潔保持を実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人の排泄パターンを把握し、声掛けの工夫をしながら自立支援に取り組んでいる。	排泄チェック表により個々の排泄状況を観察し、便秘傾向の利用者には、ごぼう茶やヨーグルトを提供する等、個々にきめ細かくに対応している。入居後に他の利用者の様子を見て刺激を受け、排泄レベルがアップした利用者もいる。2ユニット合わせて6名の利用者が、家族に説明し了解を得た上で、夜間にポータブルトイレを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量に留意しながら、ラジオ体操やレク活動に参加していただき、生きがいをもち個別での予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	無理強いすることなく行っている。入浴時はリラクゼーションしていただきながら、一人ひとりの声に耳を傾けている。入浴のない日には足浴なども行っている。	申込時に浴室は個室であり、機械浴がない旨を説明している。入浴回数は週2、3回とし、入浴を拒否する場合は足浴や翌日に声掛けをしている。入浴の際に全身観察を行い、必要により看護師に情報提供し対応している。入浴中に音楽を流し、和やかな雰囲気の中でゆったりとした時間を過ごせるよう工夫している。	

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 若園荘 3階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活習慣に合わせた安眠方法を考え実施している。明かりや室内の温度、湿度に注意し調整をしている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の目的や副作用は、薬剤情報ファイルにて共有している。症状の変化は看護師と連携し確認しながら行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの誕生日会、季節に合わせた行事の実施。職員と一緒に作るおやつや花の水やり等、外気浴を交えた気分転換の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出する機会が減ってしましたが、バスの中からであったが、お花見や紅葉狩り等、季節感じられる活動を行っている。	春には事業所向かいの小学校の桜の花見や、天気の良い日には玄関先のベンチで外気浴をしている。また、感染予防に留意しながら、ドライブや紅葉狩り、温泉場での足湯等を行う等、限られた中で気分転換を図れるよう工夫している。医療機関受診に家族が同行する際には、家族との貴重な触れ合いの機会ともしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍に於いて買い物にでかける機会がない為、施設管理となっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があった場合は、家族に電話やZOOM面会の支援を行っている。		

令和 4 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 若園荘 3階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	換気などに留意し、温度、湿度計の完備。季節に合わせた装飾を行っている。	各ユニットの共有フロアには、4人掛けテーブル3脚とソファがあり、日中は自分の好きな場所で過ごしている。午後にはラジオ体操の音楽を流し、利用者がそれぞれ自分が動きたいように体を動かしている。コロナ禍で外出ができなくなっている現在、風船バレー等も取り入れ少しでも体を動かせるように工夫している。事業所内の掃除は、共有部分は夜勤者が行い、居室は日中に主に職員が行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	個人用の椅子や共有スペースにあるソファ等、好きな場所で過ごして頂ける様、居場所作りの工夫を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に入口へ暖簾を付け、自分の部屋を理解していただけるよう工夫している。また各居室にてテレビ、加湿器の設置。ペットや家族の写真を飾っている。	居室には、ベッド、洗面台、クローゼット、チェストが備え付けられ。エアコンと加湿器で室温調整が行われている。入居時には、衣類の整理や部屋の配置などを家族と一緒にすることもあがるが、以後は利用者に確認しながら衣替え等職員が行うことが多い。思い出の写真を飾ったり、テレビを持ち込む利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活する上で、常に必要な場所には障害物を置かない。今年度もコロナ禍であるため、感染対策の徹底。安全な環境作りを目指しています。		